平成8年度　国土庁大都市圏整備局委託

先進工業国における現代都市社会の諸問題

報告書

平成9年3月

社団法人　中部開発センター

第１章
現代社会の中の学校
－現代都市社会の中の学校と若者の都市行動を考えるてがかりとして－

Keywords：都市、学校、社会、家庭、文化的文脈、若者、前近代性

本報告では、今までの議論をふまえ、またそれに啓発されて、現代都市社会の中の学校と若者の都市行動を考えるてがかりとして「現代社会の中の学校」について論じた。

この研究会を通して、現代の若者の都市行動を解明する手がかりを得たいと考えた。たとえば、若者がいったんバスに乗ると、それ以上奥へ詰めないため、他の人が乗れなくなり、中がすいているまま次々にバス停を通過してしまうことがしばしば指摘されている。また、ポケベルを持つ若者が、ベルを受けた後すぐ発信できるように、地下街やデパートの、踊り場に公衆電話のある階段にすずなりになって座り込み、階段をほとんど使えなくしてしまうことや、トイレの入り口の公衆電話のあるところにたむろしていて、公衆トイレを使いにくくしていることなどが観察されている。このままの事態が続けば、前者はバスの運行計画の見直しを必要とするかもしれないし、後者は地下街やビルの設計方針の変更を必要とするかもしれない。またそもそも教育の問題としては、このような他の人の迷惑となる行動を、決して避けようとしないのはなぜなのかを検討する必要がある。

本委員会は多様な専門的背景を有する研究者の集合体である。しかも本委員会は、各学問の確立した研究成果をもちよることよりも、各研究者の個性的な視点をもちよって輻輳的に現代都市社会をながめ、そこから創造的な観点や知見を得ることを目的とするものと認識している。そのため報告では、あえて教育学の研究的な枠組みや固有の概念の拘束から離れて、日常的なさまざまなトピックに題材をとり、あえて仮説的な試論をリアリティー豊かに論述することを試みた。またそれによって、若者の都市行動を説明することを試みた。したがって本稿も、学術論文というより、そのような特性を有した記述になっている。

なお報告の後半を占めていた、インターネットの活用などの学校教育の情報化による学校文化の特性の顕在化の問題と、情報化による学校文化と社会の文化との接触による問題こそが、筆者の本来の研究領域に直接に関わるものであ

る。しかしこれらは他の論文（大谷 1995、大谷 1996a、大谷1996b、大谷1997）でも触れた内容であるため、ここにあらためて報告として記述することは適さないと判断し、割愛した。これについてはそれらの論文を参照して頂きたい。かわりに本稿には、これまでの研究会での発言で触れたいくつかの問題を挿入した。

1．現代日本の家庭・社会・学校の相互関係の特殊性

まず最初に、現代日本の学校を考えるが、そのためには学校と家庭の関係を考察する必要がある。しばしば、欧米と日本とではどちらが家庭のしつけが厳しいかというようなことが問われる（「欧米」といっても、厳密には「欧」と「米」とをひとつにくくることはできない。とくに、家庭のありかたや、学校の在り方は、米よりも欧に近いことが多い。しかしここでは厳密に区別しない。）。このような問いに対しては、どちらが厳しいというような単純な比較ではなく、しつけの在り方の質的な違いに目を向ける必要があると考える。

分かりやすくなじみやすい例をあげよう。「ホームアローン」という映画があるが、この映画では、クリスマスに家族がヨーロッパ旅行をする際に、ケビンという名の主人公の少年が家においてきぼりになって、一人で家で過ごすことになる。そのきっかけは、旅行の準備をしている時に、ケビンが騒ぎをおこし、自分が悪かったと認めなかったため、罰のために屋根裏部屋のようなところに入れられたことであった。日本では子どもをしかるときに「出ていきなさい」とか「家（うち）にいれないよ」などと言って、伝統的に子どもを家の外に出す。それに対して欧米では、子どもをしかるときは、このケビンの例のように、外に出すのではなく、部屋に入れる。これは、実際にアメリカなどの家庭では良く見られることであり、同様の例は最近まで NHK で放送していた、アメリカで大変なロングランになっている「フルハウス」というホームドラマでもよく見られた。子どもが悪いことをすると、父親に “Grounded!” と言われて外出を禁止され、自分の部屋に入っていなくてはならなくなる。

このことの文化的背景を以下のように考えることができる。つまり欧米では、家の中は社会であると認識されている（図１）。いいかえれば家庭は社会としての第一歩である。そのため、家庭のしつけというのは、家庭＝社会の中できちんと振る舞えなければならないということを前提に行われる。では、社会から離れているところはどこかというと、それは子どもにとっては子ども

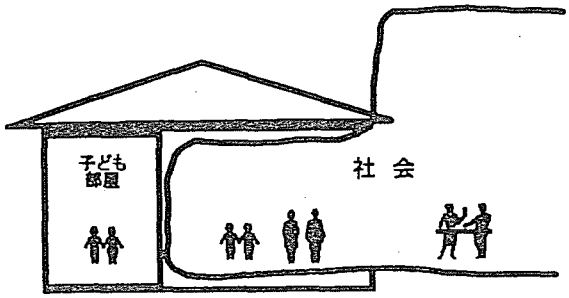

図１．欧米の家庭と社会

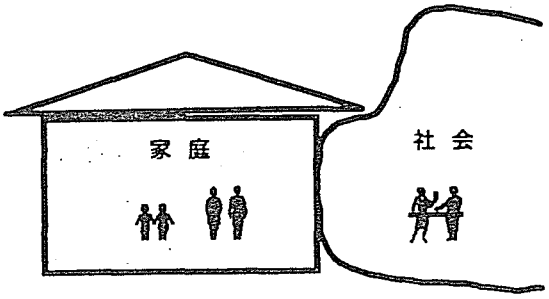

図２．日本の家庭と社会

部屋であり、大人にとっては、それぞれの個室（夫婦の場合には、夫婦の寝室）であると考えられる。したがって、子どもをしかるときに子ども部屋に入れるということは、「君を社会人として一人前と認めないよ、だから社会に出る資格はないので部屋に入っておきなさい」という罰になる。それに対して日本では、家庭は家庭としてあって、社会は家庭の中に入ってこないもの、家庭の外側にあるものと認識されている（図２）。したがって、しかるときに罰として外に出すということは、「家庭というシェルターからおまえを出し、社会という荒波にほうり出してしまうよ」というしかり方になる。こういうふうに、家庭と社会のかかわりに対する認識が欧米と日本とでは違うと考えることができる。このことが、じつは学校と社会とのかかわりを考える上で非常に重要なことだと考えている。

図３は欧米の家庭と社会と子どもの社会化のモデル的な表現だが、家庭の中には社会の習慣とか規律が入ってくるため、子どもは家庭からすぐに社会に出ていける。ところが日本の家庭は、先述のように社会ではないから、図４に示すように、社会の習慣や規律が入ってきにくい。そして、すべての子どもが、

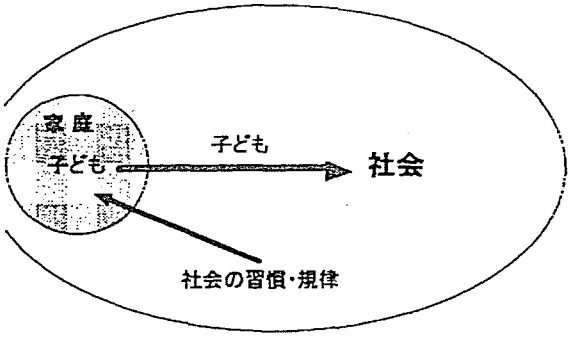

図３．欧米の家庭と社会

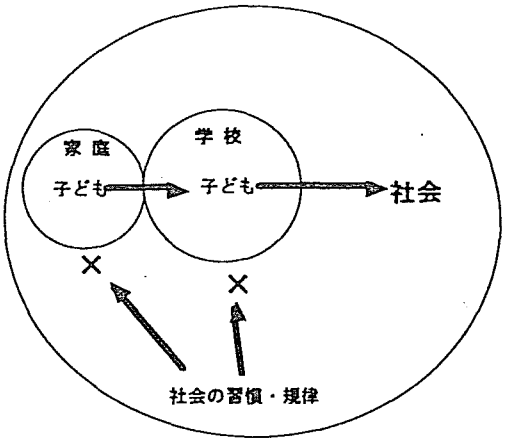

図４．日本の家庭・学校・社会

学校という単一のチャンネルを通して社会に出ていく。そのために、子どもを社会化する役目を担うのは学校である。ところがこの学校も、ある意味で、実は現実の社会ではない。それは、日本の場合には学校というのはきわめて特殊な社会であって、一般社会からは隔絶されている面があるからである。

結局、家庭は、子どもが学校をチャンネルとして社会へ出ていくことを享受するようになり、家庭の価値観や規範を学校の価値観や規範に準拠しようとする。そのことにより、学校の価値観や規範が家庭を覆うようになる。きわめて私的な経験だが、たとえば筆者一家がカナダに住んでいたときに、筆者の小学生の娘たちが、カナダの女児のようにピアスをしたいと言ったが、その時に筆者ら夫婦が最初に思ったのは、日本に帰ったときに困らないだろうかということであった。しかし、日本に帰ったときに困らないだろうかというのは、日本の社会が許すだろうかということではない。日本の学校が許すだろうかということなのである。外国で耳にピアスの穴をあけて日本に帰っていくと、日本の社会の人がそれを見てどう思うかということではなく、日本の学校生活で困るのではないかということを、真っ先に考えたのである。これは企業の駐在員などでも同様であろうと思う。しかし筆者自身、自分のそのような思考体制に気づいて自ら驚いたのである。そんなふうに、我々の価値判断や行動の意思決定を、学校が覆っていく。家庭は、それに対しさらに学校に期待するようになる。

そのような例として、たとえば「4ない運動」という、オートバイに関して、買わない、乗らない、免許を取らないというような運動が、県単位で進められ、県内のすべての高校がそれに参加して徹底されることを上げることができる。基本的に個人は16歳になればオートバイの免許が取れると法律によって決まっていることを、そのような法律で認められた個人の権利の上へ立って、県全体で、ＰＴＡと学校（あるいは県教育委員会）が一緒になって覆い尽くす形で権利や主体的な選択を制限していく。一部の親がうちの子には免許を取らせたい、乗らせたいと思っても、それに反することになるので、できないという状態になる。また別の例を上げることもできる。「子どもたちが子どもどうしでカラオケに行くので、学校でカラオケに行くことを禁止してほしい」というような要望を親が学校に出す。学校に禁止してもらわなくても、自分が自分の子どもを行かせなければいいのだが、そういう形でしか子どもの行動を規制することができなくなってしまっているのである。

学校と家庭がこういう関係を長く続けている間に、学校が家庭の上をずっと覆い尽くしていくような、このような関係はいっそう強固になってくる。しか

しこのようなあり方は、個人に法律的に保証された権利や、個人の主体的な選択・判断や、個人の自律的な意思決定の尊重といった、近代的な論理や近代市民社会のルールに反しているということもできる。どうしてこういう逆行が起きるのか。こういった点の解明が、現代の学校について研究する一つの課題であろうと思われる。

2．学校の前近代性あるいは学校の近代化のパラドックス

現代の学校を考える際に、もう一つ重要な観点は、学校文化の前近代性、あるいは学校文化の近代化のパラドックスという問題である。この問題は、別の機会（大谷 1997）にも触れたが、ここでは小論の文脈上必要であるので、別の具体例も入れながら述べることにする。

現在の学校というのは、工場や病院とともに、そもそも近代の産物とみなされ得る（桜井 1984）。近代的な学校組織は、寺子屋や藩校のような制度を脱し、児童・生徒は学年という形で年齢に応じた学習集団として組織され、また、学習内容は教科として領域や段階に応じて組織されている。とくに日本の学校制度は、近代国民国家によって組織され、完全に身分制約から解放されている。つまり日本の学校というのは、非常に近代的な学校教育制度の特徴を有している。しかし、なおかつ筆者は「前近代性」というものが日本の学校の重要な特徴のひとつではないかと考えている。

その例として、学校の制度面や教育内容面の特徴に触れるのは後にゆずることにして、ここではまず、なじみのあるトピックとしてあえて「学校の怪談」を取り上げる。最近の学校の怪談は、特に雑誌、テレビ、映画などのマスコミによる増幅作用の影響を多分に受けたものであるといえる。しかしたとえば「トイレの花子さん」という怪談があり、これを怖がってトイレに行けない子どもが出てくるなど深刻なケースもある。たとえば 1994 年度に、N市M区T小学校では、1年生の子が花子さんをこわがってトイレに行けずにおもらしをした。そこで、児童集会を開いて上級生が寸劇を見せた。その内容は、ウルトラマンが来て、怖がっている子に、「花子さんなんていないよ」とさとすものである。その後で、皆で「おばけなんかいないぞ」というシュプレヒコールを上げたうえで、「おばけなんてないさ」の歌をみんなで歌い、最後に、皆でトイレにセーラームーンの絵を貼ったのである。このような、「学校のおばけ」は、学校のどのような側面が産み出すものであろうか。これが一つの問題である。

筆者の考えでは、そもそも近代というのは、弁証法的な契機として前近代性を有している。したがって、近代の装置としての学校も、その弁償法的な契機として前近代性を有するのは当然である。問題は、それが顕在化するか、潜在化するかというである。ところで学校の場合、いかに近代的な特質を持っていても前近代的な要素は拭いされない。たとえば価値観や論理を子どもに裏づけたり、教えたり、伝えたりする以上、やはり権威とか非合理性というものを必然的に有する。また学校は社会からある程度隔絶する必要があるため、閉鎖的で密室的な空間になりやすい。また、合理性や科学性の未発達な子どもを構成員としている。それから、子どもはマージナルな存在として、論理的な反論とか自己主張を認められない場合が多く、我慢や服従を強いられる。学校のこれらの多くの文化的属性によって、存在の契機として学校に潜在していた前近代性は、学校の本質的な特性として顕在化してくるのだと考えることができる。

一柳（1993）も、学校の怪談に触れて、「学校は近代の象徴であるがゆえに前近代性を抱え込まざるを得ない両義的な場である」と述べているが、要するに学校のおばけというのは、比喩的にいえば、学校の前近代性と近代性とのはざまに出るのだというように見ることができると筆者は考えている。そうだとすると、近代的な外国の学校にも、怪談が存在するということになるが、じつはそのとおりであり、たとえばDelamont（1989）は、「トイレの中の修道女－都市伝説と教育研究」という論文で、自分が子どものとき、自分の進学することになった学校で青い服をした修道女の幽霊が女子トイレに出るというううわさがあって、トイレに行くのが怖かったというある女子大学院生の話を紹介している。この例は、進学予定の学校についての怪談であって、花子さんのような在籍中の学校の怪談ではないが、出るのが女性の幽霊であること、場所がトイレであることなどの点で、花子さんと共通点が多い。

学校や学校文化におけるこういう前近代的なできごとの例は枚挙にいとまがない。たとえばある市では、最近、全市の学校のパソコンをインターネットに接続できるようにしたが、接続の際には、市の情報教育センターのような施設のプロクシーサーバを通すようにした。そこで、教育的でないWWWページページなどを見ないように、そのセンターの２人の指導主事（これは教員であり、教員文化を有している）が、手で、ここはいい、ここはいけないと探している。世界に何十万あるのか、何百万あるのか知らないサイトをこうやって選別している。こういうことを、ソフトを使って自動的に行うのならば近代的といえるが、手でやるというのは、手続きとして全く家内工業的、前近代的な体制だと

いえるし、そういった手続きで、インターネットの世界に通用すると考えている発想がそもそも前近代的で時代錯誤的である。

ところで、先進国の学校のなかでも、日本の学校は、特に前近代性が強いと考えられる。それは、日本の学校経営の基本的政策や、教育内容の選択つまり教育課程編成が、公選制に基づく教育委員会の主体性、いいかえれば住民自治によるのではなく、国家的な教育政策によりトップダウンで文部省→任命制の都道府県教育委員会→任命制の市町村教育委員会→学校と行われること。それから教育自治の考え方や制度が極めて薄いこと。日本では、父母や児童、生徒は学校を選べないこと。また、教師も教育委員会採用であり、働く学校を選べないこと。また、教師の専門的力量よりも、教師と子どもの信頼などの心情的な結びつきを基盤とした教育が重視されていること。すなわち基本的に、近代市民社会の原則やルールとか制度によらないで学校が運営されていることによる。

なお、学校である以上はそういう前近代性はぬぐいされないので、もし、それの完全にない学校を考えるのなら、それは多分、「エデュケーション・オン・ディマンド」のようなものになると思われる。情報ネットワークでエデュケーション・オン・ディマンドを提供すれば学校が要らなくなるという主張がある（たとえば Perelman 1992）が、そういう教育システムでは怪談は存在しないと推測できる。あるいは、最近の、チケット制で好きなときに行って学習できる語学学校も、ある種のエデュケーション・オン・ディマンドと見なすことができるから、これらの学校には怪談は存在しないと推測することができる。

3．社会における前近代性の拡大再生産の場としての学校

学校を社会の近代化による多様な情報や刺激から隔絶させ、学校の前近代性を保持させているものを、比喩的に「学校の壁」と呼ぶことにする。この「壁」とは、先述のような、学校経営、教育内容の選択、教員人事など、学校の有するさまざまな前近代的制度であると考えてよい。この学校の壁は、市民社会の論理やルール、合理化、科学化などをはねつけてしまい、通さない。それに対して、社会の中の前近代性は、学校固有の文化と、文化的に適合するので、学校の壁によってふるいにかけられても学校の中に入ってくる。それらはたとえば権威への服従、非合理性、組織の忠誠等である。そして先述のように、日本人は学校を通して社会化され、社会に出ていくので、学校に社会から注入され

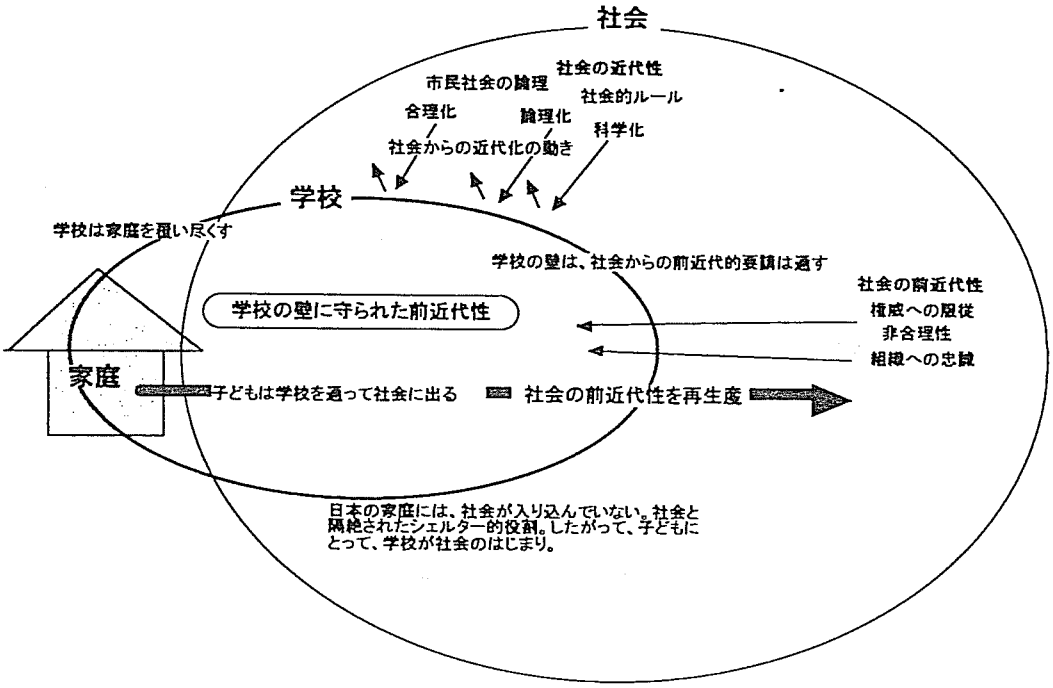

図5. 社会の前近代性の拡大再生産の場としての学校

る価値観や規範があれば、それを持って社会に出ていくことになる。したがって、学校は、学校の壁を通す価値観や規範を、子どもの社会化の過程で身につけさせ、それを身につけて社会に出すことによって、そのような価値観や規範を拡大再生産していく機能を有していると考えることができる（図5）。

たとえばもし、日本の企業社会に前近代性があるとすると、それを拡大再生産しているものは企業そのものと同時に学校でもあると考えられる。最近とくに、日本の企業社会がいろいろな意味で前近代的な特徴を有していることが問題になっている。たとえばS商事のロンドンでの銅取引をめぐる巨額損失事件とか、あるいはTデパート、N証券、DK 銀行等の総会屋への資金提供や不正融資等がそれである。また、それを監督する省庁の責任も問題にされている。そのため、企業が近代的なルールと組織によらないで運営され、そういう前近代的な忠誠心に支えられた企業群が会社社会というものをつくっているという国民経済の体質が問題として指摘されている（朝日新聞「窓」96.7.19）。現在は、国民経済を越えた、世界経済の時代だと言われるが、日本は国民経済の発展の時代に、近代性を十分に発展させず、前近代的な精神的基盤の上に経済を発展させてきたのではなかったろうか。そしてそのことが他の先進諸国の不審を買う要因となっている。このような国が、世界経済になってさらに大きな問

題を引き起こす可能性は否定できない。国民経済に問題があるとするなら、それは、企業あるいは企業社会の体質の改善だけでなく、そのような前近代性の拡大再生産の場としての学校を問い直す必要がある。

4．学校の文化的文脈の高さ

（1）学校の文化的文脈とその高さ

現在の学校の特性をあらわすものとしては、「文化的な文脈の高さ」という観点も重要である。ある地方や国や機関などの成員に共通な行動の様式、価値観、そういう文脈を社会的、文化的文脈と呼んでいるが、ホール（1979）は、人々が互いに深くかかわり合っている文化を文脈の高い文化だと規定しており、そういうところでは、簡単なメッセージでも深い意味を持って伝わっていくと述べている。逆に個別化の度合いが強い文化を文脈の低い文化と呼んでいる。そして、未知の高コンテクスト文化は、外の者には全く不可解なものに見え、日本もそういう国であると述べている。

学校の文化的文脈については、私たち教員にとっては非常に不名誉だが、「先生の常識、社会では非常識」という言葉があり、少なくとも学校文化とか教員文化というものは外の文化とかなり異なっていて、しかもコンテクストが非常に高くなっていると考えることができる。それに加えて学校では、「学級経営」あるいは「学級づくり」という営みによって、学級の成員を学級の仲間として形成し、ときとして共通の目標を持ち、共通の行動様式をとるようにすることを通して、学級のコンテクストを非常に高くしている。そういうことは、いじめのような問題をなくすためにも行われるのだが、逆にいじめや不登校を生む背景となっているとも考えられる。（以上の学校の文化的文脈の高さについては、大谷1996 でも触れたが、以下では、学校での具体的なできごとを例にあげて述べる。）

（2）学年による先輩－後輩の序列化

コンテクストが高くなるということのわかりやすい例を上げると、たとえばいま、中学校などで先輩－後輩の権威の序列化が非常に強くなっている。以前は、中学校では上級生にも敬語はあまり使わなかった。ましてや中学校で、上級生を「○○先輩」などとは呼ばなかったが、今は普通である。そしてそのような序列化は、外部からは分からないコンテクストで維持されている。たとえ

ば名古屋市の多くの中学校では、学生カバンとは別に、布でできた補助バッグというものがあるが、それには紺と白の二色があって選べるようになっている。しかし、暗黙裡に、下級生は紺で、上級生は白というふうなきまりが存在する。下級生がこのことを知らないで白を持ったりするといじめられたり、いじめられないまでも上級生から睨まれてしまったりする。また、テニス部のラケットなども、学校で注文できるものには黒と白があるが、白は上級生ということになっている。セーラー服のスカーフも結び方がいろいろあって、下級生は長く結ぶべきで、短く結んでいいのは上級生というような決まりがある。こういうことは氷山の一角で、さまざまなことが全体としてプレッシャーになって、下級生の行動を規制している。（これは筆者の趣味ではないが、宝塚音楽学校では現在、上級生と下級生が廊下ですれ違うとき、下級生は壁にへばりつくようにして上級生に道をあけているそうだ。ところが、宝塚の往年のスターは、昔はそんなことはなかったと述べている。）このような上級生からのプレッシャーをいかに下級生が感じているかは、卒業式のころの下級生の服装の変化にも表れる。たとえば名古屋市内の公立中学校では、卒業式が非常に早くて高校入試の前に行われるが、卒業式が過ぎて３年生がいなくなると、下級生の女子は、待っていたかのように、急にスカーフを短くむすんだり、スカートを短くしたり、ルーズソックスをはいたりし始める。

いっぽう教師に、スカーフの結び方にそういう違いがあるのを知っているかとたずねると、知っていると答える。つまり教師は、こういった生徒の間の緊張関係を、意図的あるいは無意図的に、生徒の管理に使っていると考えることができる。このように時代に逆行したことが、現代の日本の学校ではおきている。

（３）「公園デビュー」と学校の文化的文脈

また、最近、「公園デビュー」ということがマスコミで取り上げられて話題になっている。都市の住宅地の公園に、若い母親が乳児あるいは幼児を連れて最初に行くことをこう呼ぶのだが、その際に、簡単には仲間に入れてもらえないため、どのような挨拶をすればよいか、どのような服をきていけばよいかというようなことが、マニュアル化され、女性雑誌の特集にさえなっている。しかし、このようなことが事実だとすると、天下の公園で、前からいた者がグループを組んで先輩風をふかせ、あとから来るものはそれに挨拶をし、気に入られなければ仲間にいれてもらえないというような状況は、おかしな現象である

とともに、きわめて不健康な文化である。仲間に入れてもらえないことが不健康なのではなく、徒党を組んで、仲間に入れるとか入れないとか言っていることがそもそも不健康である。

このような現象は、現在の学校の生徒間の状況ときわめて良く似ている。それゆえ、学校で高コンテクストに慣れた生徒たちが、卒業後も無意識にそういった文化をまといつづけ、それを公園で結実させたのが公園デビューだと見ることができるのではないかと考えている。つまり、学校での文化的文脈の高さが、こういう公園デビューなどというおかしな現象の源になっているのではないだろうか。そうだとすると、学校は社会における問題の発生源あるいは起源になっているといわざるを得ない。

5．現代日本社会の文化と学校特有の文化の関わり

（1）学校文化の背景としての競争と選抜の本質

こういう学校特有の文化、とくにその「逆行」的な側面を考えるためには、学校文化が持っている競争と選抜というものの本質を見ておく必要もあるだろう。競争と選抜の本質やその機能については、多くの論者が自説を述べているが、ここでは竹内(1993)の考え方を紹介する。竹内は、現在の選抜システムを、「傾斜的選抜システム」だと見る。それは現在非常に高い進学率の中で、わずかな偏差値の違いで学校が総序列化されていることを指している。これを、「完全なあきらめを迂回」しながら働く「たきつけのテクノロジー」と見ることができる。あるいは「分相応のアスピレーションを維持」させるしかけと考える。それに加えて、一たん選抜がなされた後にも、次の段階の選抜で、近いものと競争して上昇する「層別競争移動」が行われる。たとえば中クラスの高校へ行ったら、上のクラスの高校の子と競うようなことはないが、同クラスの高校の子となら順位を競うということはある。もう一つ、A高校には勝てないけれども、C高校には負けるなというような、団体間の競争ということもある。結果として、「選抜後のアスピレーションというものが完全に冷却されないで、縮小されつつ、再加熱される」、そういうのが今日の大衆的な受験競争の背後にある仕掛けだと竹内は述べている。

以上のような受験体制による競争と選抜のシステムは、1960 年代以降の高等教育を含む学校教育の量的拡大の中で、それを吸収するシステムとして成立してきたものだと考えられる。そしてじつは、ここに述べているような競争と

選抜の持っている本質的な問題や機能というのは、これまでの日本の文化の中で非常に特殊なものである。このような状況を背景とする今日とは、若者を取り囲む特殊な文化が非常に大きなプレッシャーをもって若者の行動を規制している時代だと考えることができる。このプレッシャーとそれによる若者の価値観や行動の変化によって、若者の世代とその上の世代との文化的な断絶は非常に厳しいものになっており、ある意味では文化的危機を招く可能性さえあるのではないかと筆者は考えている。

（2）大衆消費社会の文化と学校文化

いっぽう、このような現代の学校は、消費が開発される大衆消費社会の中にある。したがって、学校のこのような文化は、学校の外側の豊かな大衆消費文化との間で交互作用をおこす。結局、学校のフォーマルな論理と、豊かな消費社会文化とがコンフリクトを起こしながら、社会の文化がある意味で学校文化に浸透してくる。この浸透に対しては、ある意味では、「豊かな社会が学校のフォーマルな論理に乗らない生徒たちの振る舞いを醸成して、選抜システムの機能をくずし」（竹内前掲書）てしまい、受験競争システムを危うくするという不安もある。しかし、むしろ逆に、子どもたちの学校のフォーマルな論理からはずれた大衆消費行動は、むしろ競争と選抜による強度の緊張を維持するためのハンドルの「遊び」のようなものであって、学校は、現在の大衆消費社会、情報化社会にあって、前近代的なあり方を維持するために、そういう遊びを意図的、無意図的に取り入れている、あるいは必要なものとして容認しているとも考えられる。その場合、その遊びは、「既存の選抜システムによる支配関係の枠内に包摂されたもの」（竹内前掲書）だと考えられる。その観点に立つと、最近、校則があるにもかかわらず、男子生徒も女子生徒もかなり制服がアレンジされていること（男子はズボンを「腰ばき」といって腰骨に引っかけるようにし、裾が地面にすれるようにしてはいていることや、女子がスカートを短くしたり、ソックスをルーズソックスにしていること）に対して、現代の学校がそれを完全に禁止してしまわない体制が文化的にできているということの説明ができる。つまりそのような生徒の行動は、選抜システムを維持するための「遊び」として、学校がそれを必要としているのだという解釈が成り立つのである。

しかしいっぽうではやはり学校は、そういった文化が浸透してくればくるほど、学校のフォーマルな論理への忠誠を生徒に求める。その結果、社会の変化にもかかわらず、学校の論理は一層フォーマルになる。ここでフォーマルとは、

「正式」かつ「形式的」の意である。たとえば校則がより細かく厳しくなっていく。そしてそのことによって社会の変化から一層隔絶する。社会の文化と逆行した文化がフォーマルな文化として学校に形づくられていく。このことは、学校でどんどん先輩、後輩の区別が厳しくなっていったり、普通の社会と逆のことが学校の中で起きていることの背景のひとつとして、重要であると考えられる。しかしまた、そういったフォーマルな文化と、「遊び」として容認された現実の生徒の文化との乖離が生じてくる。この乖離がまた、学校の文化に独の特性を与えると考えられるが、ここではこれ以上触れない。

6．若者の都市行動に見られる他人に対する態度の変化

（1）他人の主体性に踏み込まない傾向

筆者は学生の書いたいじめについてのレポートなどをとおして、現在の若者の対人関係の意識が、筆者らの世代とはかなり異なっていることを認識してきた。たとえば、「いじめがあっても、教師は出てはいけない、いじめられているという訴えがあっても、いじめている子をしかってはいけない、いじめている方もいじめられている方もどちらの味方もしてはいけない」など、これまでの見方ではまったく理解できない記述がある。

また、大学では4月ごろ、学部や学科やサークルの新入生歓迎コンパがあり、夜、コンパの直後などに、学生が学内の道に広がっていることがよくある。そういうときに、そこを車で通るとき、道をあけてもらうためにクラクションを鳴らしたくないので、ヘッドライトをアッパービームにして、「チカッ」とサインを送る。しかしそのときに非常に興味深いことがおこる。そのライトに気づいた学生は、横にどいて道をあけてくれる。しかし、それに気づいてどく学生は、一緒に立っていて向こうをむいていて、ライトのサインが見えなかった学生に、車が来たことを告げないことが多いのだ。筆者らの世代だったら、車が来たよと告げるか、肩に手をかけて一緒にどいたりするとおもうのだが、そういうことはほとんどない。彼らにとって、車が来たことを告げれば、「どくべきだ」と提案することになる。そういう提案は、他人の主体性に踏み込むことになるので、できればしたくない。自分が告げなくても、車がもう一度ライトで合図するか、最終的にはクラクションを鳴らす。自分が告げなくても決定的な問題になるわけではない。ならば自分が告げることはしたくない。そういった感じを受ける。要するに、そんな小さなことでも、他人の主体性に踏み込

むことをしないような文化ができているようなのだ。

（2）バスに乗車した若者が奥につめないこと

ここで、はじめに述べたバスの問題にやっと触れることになる。現状を説明しておく。たとえば筆者の自宅は運転免許試験場のバス停の前にあるが、試験場帰りの若者は、ワンマンバスに乗車すると、席があいているうちは席へ行って座るが、満席になると、料金を払って乗車したところから、ほとんど中へ行こうとしない。当然、つぎつぎに乗ってくる人は乗れなくなってしまう。運転手は奥へ詰めるようにアナウンスするが、若者は従わない。運転手によっては、運転席を立って後ろをむいて奥へつめるように言うのだが、それでも誰も従わない。その結果、奥はがらあきなのにもうこれ以上乗れない状態になり、運転手もあきらめてその状態で発車せざるを得なくなる。このバス停は始発で、終点は地下鉄の駅なのだが、気の毒なのは、次以降のバス停でバスに乗り、地下鉄駅に行こうとしている人々で、バスは、奥ががらあきなのに、もう人をのせられないため、次以降のバス停を通過してしまう。これでは、時間帯ごとに利用客の数を想定して作成した運行計画は無駄になってしまう。同様のことは、筆者が読んだある私立大学の学生のレポートでも書かれており、地下鉄駅から大学までのバスが、地下鉄駅を、奥ががら空きなのにそれ以上乗車できないので発車してしまうため、バスを何台待ってもなかなか乗れず、大学に遅刻してしまうと訴えてあった。同様の問題はここ数年新聞の投書欄などで取り上げられているが、これをどう解釈できるのか。少なくともこのことは、車が来たことを告げない文化と同じ背景を有するように思われる。

（3）「情けはひとのためならず」の解釈とその文化的背景

このことに対する答えのヒントは、「情けはひとのためならず」ということわざの解釈をめぐる若者の実態から得られる。このことわざの意味は本来、情けをかけることは他人のためだけではなく、結局それは、めぐりめぐって、まわりまわって自分にかえってくるので、自分のためにもなるのだという意味である。しかしこのことわざの意味が誤解され、「他人に情けをかけることはその人のためにならない」というふうにまちがって解釈されていることの多いことが、かなり前から指摘されてきた。筆者が、主に文学部の1年生を対象とした1996年度の教育原理の授業（受講者数約70名）で、これについてアンケートを取ったところ、本来の意味を答えたのは42人であり、誤っていたのが

16 人、その他の解釈や回答が数名あった。

これに対して筆者はずっと、このような解釈の誤りは国語力の低下によるものだと思っていた。「ためならず」というのは、「ためなり」という形容動詞の未然形に打ち消しの助詞がついたもので、「ためでない」というようにしか解釈できないからだ。「ためにならない」の意味であれば、「ためにならず」にならなければならない。とくに最近の若い世代は、文語的な語感を喪失している。筆者が小さいころまでだったら「〇〇なかれ」や「〇〇べからず」など、文語的な文章が、看板から、あるいは標語として、目や耳から入ってきたため、文法を習わなくても、なんとなく語感を有していた。それが失われてしまったせいであろうと思っていた。

しかし筆者は、誤解の理由を、最近、そればかりではないと考えるようになった。ひろさちや（ひろ・堀田 1985 ）によると、アメリカ人などにこのことばの意味を説明すると、どうしても理解できないため、「あなたがＡさんに情けをかける。すると情けをかけてもらったＡさんはＢさんに情けをかける。ＢさんはＣさんに、ＣさんはＤさんにというようになって、Ｘさんまでいき、そのＸさんがあなたに情けをかけるということがあるからあなたはＡさんに情けをかけるべきだ」という意味だと順を追って説明すると、「Ａ→Ｂ→Ｃ→Ｄ→というような順序は、最初に情けをかける人が指定しておくのか？」と質問されてしまうと書いている。そもそも、「めぐりめぐって」とか「まわりまわって」という観念は、ある意味で非常に仏教的だし、同質文化的、高コンテクスト文化的である。このことわざは、そういった高い文化的文脈の上に成立している。したがってそのような文化的文脈をもたないアメリカ人には、それがきわめて理解しにくいのだと考えられる。アメリカ人の考える、人と人との関係は、もっと、主体的に構成するネットワークのようなものであり、まわりまわってというような、不可視で運命的な連鎖関係とは異なるからである。

（３）文化的文脈を背景としたことわざの解釈の変化からみた若者の文化

ところでことわざというものが、文化的文脈によって異なる意味をもつようになることはよく知られている。たとえば、" A rolling stone gathers no moss." (転石苔付かず）ということわざは、このことわざの生まれた英国では今でも、「動き回っていると良いことはない」、つまり「石の上にも三年」というような意味だが、アメリカとカナダ、つまり北米では、「動き回っていないと苔がついてしまう」したがってつねに動いていなさい、という意味になっている。

これは、新大陸の文化を背景にことわざが意味を変えた例である。つまり、ことわざの意味の解釈は、自分たちの文化的なコンテクストに照らして意味がとおることが重要である。そのためことわざの意味は、文化的文脈に合うように解釈され、それが定着して機能するようになる。

これらのことを背景に、現代の日本の若者がこのことわざの意味を正しくとらえないことを考えることができるのではないか。つまり日本の若者がこのことわざの意味を取り違えていることの背景としては、彼らの国語力の問題よりも、彼らをとりまく文化的文脈が変わってきたためだと考える方が、問題の本質に近いのではないかという考えである。現代の若者には、まわりまわってとか、めぐりめぐってということばは、ある意味で死語である。そういった文化的文脈を有さないから、そのような意味に解釈できないのではないかと考えられるのである。

ふりかえって先のバスの中の問題を考えると、現在の若者が他者のために中に詰めないのは、つまり、自分が人と人との緊密な連鎖関係の中にいるという感覚を持っていないからではないか。彼らはそもそも自分が中に詰めないと他人が乗れなくなるという意識がない。だから罪悪感もない。同時に、自分が中につめれば他人が乗れるという感覚もない。自分が他人のためにならないことをしているという自覚もなければ、自分が他人のためになる行動ができるという自覚もない。自分のために他人が配慮し行動してくれるという感覚もなければ、自分が他人のために配慮して行動できるという感覚もない。いいかえれば、他人を配慮することをしらないだけでなく、他人に配慮されることをしらない。もちろんこれらのことは頭では分かっており知っている。しかしそれは胸に落ちておらず、行動に結びついていないのである。いいかえれば、彼らと他人とを結ぶ意識の鎖は深い所で切られているのである。このように考えると、最初に上げた問題のうち、バスの問題だけでなく、階段をふさいでしまうことや、トイレの入り口をふさいでしまうことも、理解できる。

ところで、「まわりまわって」を理解しないアメリカでは、このような問題はどうなっているのだろうか。現代の若者が、ある意味でアメリカ的になったためにこのような問題が起きているのなら、アメリカでもこのような問題が起きているのではないかと考えられるからだ。しかしアメリカでは、このような問題が起きないための対応が取られている。それは第一に、小学校段階から、たとえばドアの「ホールド」（次にドアを通ろうとする人のために、ドアを支

えて待っていてあげること）などを、学校できちんと指導する。場合によっては、ひとりの子が、昼休みでグラウンドに出ていた子どもたち全員が通るまでホールドを続けることもある。そして同時に、支えていたドアを受ける子、あるいは支えてもらって通る子は、”Thank you.” を言うようにきちんと指導される。このように、暗黙のうちに人と人との連鎖的な関係を意識する文化でないために、他人のために役に立つことを積極的に教えている。（そのためか、アメリカやカナダでは、日本の大学で筆者が経験するように、次に来る学生のためにドアを支えていると、学生はその間をすり抜けて通ってしまうというような経験は一切したことがない。）また、筆者の経験では、トロントのバスには、入り口近くに、英語で「もう少し奥へ行って下さい」という看板があり、奥へいくと、「あともう少し奥へ行って下さい」という看板があり、さらに奥へいくと「奥に来てくれてありがとうございました」という看板があった。このように、個人の主体性に積極的に訴えて他人のために行動することを呼びかけているのも、文化的な特性を補うものだと見ることができよう。

それに対して日本では、そもそもまわりまわってというような人と人との連鎖的な関係が無意識に自覚されていたため、そういう行動をとるためのしつけを意図的、体系的に行って来なかった。また、大人の主体性に訴えるようなことも行って来なかった。ようするにこれまでは、そのようなことは文化が支えてくれたために、そういった教育や呼びかけの必要がなく、それを行って来なかったのである。しかしこれまで述べてきたように、現在はそのような文化が若者に共有されない時代になり、それが必要になっている。それにも関わらず、いまだにそのことに気づかず、教育や呼びかけを怠っている。ここに問題があるように思われるのである。

おわりに

本稿では、現代の若者の都市行動の背景となる、学校の文化的な特性や若者の意識の特性について、最初に述べたようにやや自由な観点から、具体的な例を用いて論じてきた。もちろん以上の考察は十分なものではなく、それらについての決定的な解明となるものではないし、それらの問題の決定的な解決方法を提案するものでもない。しかし、これらの考察が、複雑で理解不可能に見える学校の特性や若者の意識や行動を理解するための、ひとつの視点を提供するものとなれば幸いである。

文献

Delamont,S. (1989)The Nun in the Toilet: Urban Legends and Educational Research、International Journal of Qualitative Studies in Education.Vol.2, No.3

ひろさちや・掘田雄康(1985)「仏教とキリスト教の常識」春秋社

エドワード・T・ホール(1979)岩田慶治／谷泰訳「文化を超えて」TBSブリタニカ

一柳廣孝(1993)学校というメディア　～学校をめぐる都市伝説と怪談のフォークロア～、NAGOYA発 No.26, 1993,　名古屋市（電通編）,15-18

大谷　尚(1995) コンピュータが教室にもたらすもの.教育と医学.1995.2.64-69

大谷　尚(1996a) 情報を交流する能力、赤堀侃司編「教職研修情報化時代に求められる資質・能力と指導」、教育開発研究所, 102-105

大谷　尚(1996b)コンピュータは教室に何をもたらすか　～コンピュータを用いた授業を対象とした観察研究と分析の必要性～、日本教育方法学会編：「教育方法 25 戦後 50 年、いま学校を問い直す」、明治図書、129-139

Perelman, L.J.(1992) School's Out:Hyperlearning, the new technology, and the end of education. William Morrow and Co., Inc.,

大谷　尚(1997)インターネットは学校教育にとってトロイの木馬か　ーテクノロジーの教育利用と学校文化ー　学習評価研究 No.29

桜井哲夫(1984)近代の意味～制度としての学校・工場～、日本放送出版協会

竹内　清(1993)生徒文化の社会学、木原孝博ほか編著「学校文化の社会学」福村出版